



竈門神社拝殿

第3章 史跡の概要

第1節	宝満山の歴史	64
第2節	各地区の概要	68
第3節	自然災害	84
第4節	宝満山遺跡群の調査	88
第5節	宝満山の文化財・文化遺産	93

第3章 史跡の概要

第1節 宝満山の歴史

1. 古代の宝満山

宝満山は信仰の山として知られ、現在では竈門神社上宮(山頂、標高829m)、下宮(本社殿、標高175m)が鎮座する。中宮跡は8合目、標高725mに位置し、現在堂社は無い。山の名称は歴史的には「御笠山」「竈門山」の異称もある(『筑前ちくぜんのくにぞくふどきかいばらえきけん国 続風土記』貝原益軒)。近世前半期に成立した山の縁起を記す『竈門山宝満宮伝記』には「天智天皇の御宇都を太宰府に建玉う時、鬼門に当り竈門山の頂に八百万神之神祭りし玉ひ」とあり、大宰府の鬼門にあたる鎮めの場、という認識があったことを示している。宝満山に鎮座する竈門神社は延喜式や六国史に著された「竈門神」、「竈門宮」に連なるもので、『續日本後紀』九にんみょうてんのう仁 明天皇承和7年(840)四月条の記事が史料の初見とされる。



写真 3-1 大宰府政庁跡から望む宝満山

一方で、『竈門山宝満宮伝記』には「天武天皇の御宇心蓮上人常に密阿伽の水を以て山中を修行す」とされ法相の僧心蓮もまた伝説的な開山の人として描かれている。寺院の成立については『扶桑略記』、『叡山大師伝』における延暦22年(803)の伝教大師の薬師仏建立に係っての記事に「竈門山寺」の名が見られることを嚆矢の例とし、承和14年(847)の入唐僧円仁の渡航記録書『入唐求法巡礼行記』に「大山寺」、『石清水文書之二』における沙弥證覚の宝塔建立の記事(承平3年(933))では「大宰府竈門山」、『後拾遺往生伝上二』の僧安尊あんそんの死亡記事(応徳3年(1086))では「内山寺」の名称が登場する。『元亨釈書』の衆徒の争論記事(仁治4(寛元元年)年(1243))には「有智山寺」とされ、おおよそ平安前期に「竈門山寺」、平安後期に「大山寺」、平安後期以降は「有智山寺」、「内山寺」と名称が変遷したことが読み取れる。おのおのが連続した一つの組織名か否かは解決されていない。「大山」の読みが「だいせん」であれば音においては「内山」に通じ連関する可能性もある。下宮地区のホノケ(字の下位の小地名)に「おおやまじ」があるとも言われる。寺の運営にかかわっては、円仁が参籠読経した際(承和14年(847))には観世音寺僧が伴う形が採られ、独立した寺院体制が整っていない様子が伺われる。沙弥證覚による宝塔建立の記事(承平3年(933))に登場する塔は、最澄が国家鎮護の思想を背景として国内6所(近江国比叡山東塔、山城国比叡山西塔、上野国浄法寺、下野国大慈寺、豊前国宇佐弥勒寺、筑前国竈門山寺)に配置の計画がなされた塔の一つであり(『六所造宝塔願文』)、宝満における仏教寺院展開初期の段階から比叡山が深くかわりを持っていたことが知られる。発掘調査(宝満山遺跡第34次調査)によって詳細が明らかになった本谷礎石建物がそれに比定されている。

平安後期の長治2年(1105)には大山寺をめぐる石清水八幡宮と比叡山延暦寺との間で争論となり、山内での大宰府兵士と叡山悪僧との合戦、平安京における日吉神人、叡山大衆による御所陽明門への強訴事件へと発展し、これをきっかけとし大山寺は比叡山の末寺となった。騒動の

背景には永久4年(1116)『観音玄義疏記』記事の「博多津唐房大山船龔三郎船頭房」や建保6年(1218)『百鍊抄』記事の「大山寺寄人張光安(博多綱首)」などから同寺院が主体的におこなっていた博多を拠点とする貿易の利権が係ったものと推測される。この段階においては寺に職能で従属する神人や寄人といった人々の中に博多の華僑貿易商まで含まれている様相から、寺の規模や機構自体が巨大化していたことを示唆している。

2. 中世前期の宝満山

『台明寺文書』の応保2年(1162)の記事によれば(太宰府市2005)には「京都には本寺叡岳、鎮西には本山内山」とあり、平安後期の『梁塵秘抄』巻二には「筑紫の靈験所は大山・四王寺・清水寺」と詠われており、宝満山は古代末から中世にかけては天台系の「大山」や「内山」「有智山」の名前を有す寺院の在所としてその存在が国内に広く知られていた。

宝満山と峰続きの若杉山佐谷にある山岳寺院建正寺にある正中2年(1325)銘の板碑には「天台別院有智山末寺於左谷山賢聖院」とあり、周辺の山岳寺院を系列化して宗像方面や糸島方面にまで勢力を拡大していた様子が伺える。

康和4年(1102)、大山寺は大宰府の「府中宇佐町」の土地を奪い取ろうとして八幡宇佐宮と争うなど、12世紀以降には大山寺の関係者が荘園の相論や安堵に係わった事績が散見される。承久2年(1220)では吉岐、建長元年(1249)には肥後、建治2年(1276)には肥前の荘園経営に係わる文書があり、筑前、筑後、肥前、肥後に分布する竈門社や宝満宮の存在は当該期の宝満山の経済活動に結びつく可能性のあるものとして注目されている。

3. 中世後期の宝満山

鎌倉幕府が滅亡すると地方の守護は足利方の北朝か宮方の南朝に就くかの選択を迫られ、筑前を領していた守護武藤少弐氏は北朝方の支持を鮮明にした。このことにより南朝方に就いた肥後菊池氏との軋轢が生じ、建武3(文中元年)年(1336)宝満山中の内山の城(詫間文書等では有智山城)に菊池氏が攻め入る事件が発生した。城を守っていた武藤貞経(妙恵)は寺仏堂で自刃し堂社を焼くなど悲壮な落城劇として『太平記』や『梅松論』に描かれている。以降、有智山や宝満山に関する史料は要害としての記載が増える。応安5年(1372)には北朝方の今川了俊、南朝方の懐良親王を有智山城に攻め、太宰府から懐良親王が置いた征西府を退けるなど、九州での南北朝争乱の主戦場となった。弘治3年(1557)に大友宗麟による山内の検地がおこなわれ内山、南谷、北谷、原にある寺院、坊舎に課役し、堂社を破壊するに及んだとされている。永禄2年(1559)には豊後守護の大友宗麟が筑前を抑え宝満城に城督として高橋鑑種を派遣した。以降、天正14年(1586)に薩摩から島津氏が侵



写真 3-2 有智山城跡

攻するまでの間に鑑種謀反による主家である大友家との争乱、城督を継いだ高橋 紹 運^{たかはししょうん}と在地領主秋月氏、筑紫氏との闘争で何度も山中での合戦が繰り返されている。その中、それまで370あったとされる坊は四散し、翌永禄元年(1558)に残った坊中は山上に坊宅を移す事態となった。

4. 近世の宝満山

戦国時代の混乱により宝満山の坊は多くの者が逃散し著しく荒廃した。天正15年(1587)に豊臣秀吉が米100俵を寄進したことから山内の復興が始まる。一方では長らく座主を務めてきたとされる浄戒坊^{じょうかいぼう}は文禄元年(1592)に断絶し、残った坊中は組織としての改変を余儀なくされていた。秀吉の天下統一後に筑前に入った小早川隆景^{こばやわたかかげ}は文禄2年(1593)に竈門神社に対し祈禱料として米100石を寄進した。この年から堂社の再建が始まり、慶長2年(1597)には本社二字ほか石鳥居、講堂、神楽堂、鐘楼、行者堂、末社、僧坊も再建された。文禄3年(1594)には38年間断絶していた峰入行が復興されている。この頃には宝満二十五坊と呼ばれる一山の形が固まりつつあったと思われるが、慶長2年(1597)に座主を輪番で各坊が務めることとしている。しかし、経営的には一山としてのまとまりを欠いていた。

慶長5年(1600)には筑前に入国した黒田長政^{くろだながまさ}が竈門山に300石を与えんとするも、それを辞退し代わりに課役の免除を願い出ている。この時期の山中の経済的な困窮は顕著で、黒田藩は修験の山であった豊前求菩提山^{ぶぜんくぼてさん}に習い、茶業で生計を補助させるため茶実10石を与えた。また、元和4年(1618)には藩より25石が与えられている。『竈門山旧記』によれば、この頃、東院谷、西院谷の石垣や登拝道も公役として普請されたとみられ、近世的な山内の坊の景観が徐々に徐々に成立した。しかし、山中は坊中の不和などにより山林の管理も行き届かず堂社まわりは樹木の伐採著しく草地となり、そのこともあってか寛永10年(1633)には講堂、神楽堂、鐘楼、行者堂など中宮地区の復興された堂社が悉く焼失している。宝満山の南西にある尾根続きの別峰である愛嶽山^{あいだくさん}は、山頂周辺で平安中期の祭祀土器が採取されている山であるが、『筑前国続風土記』によれ

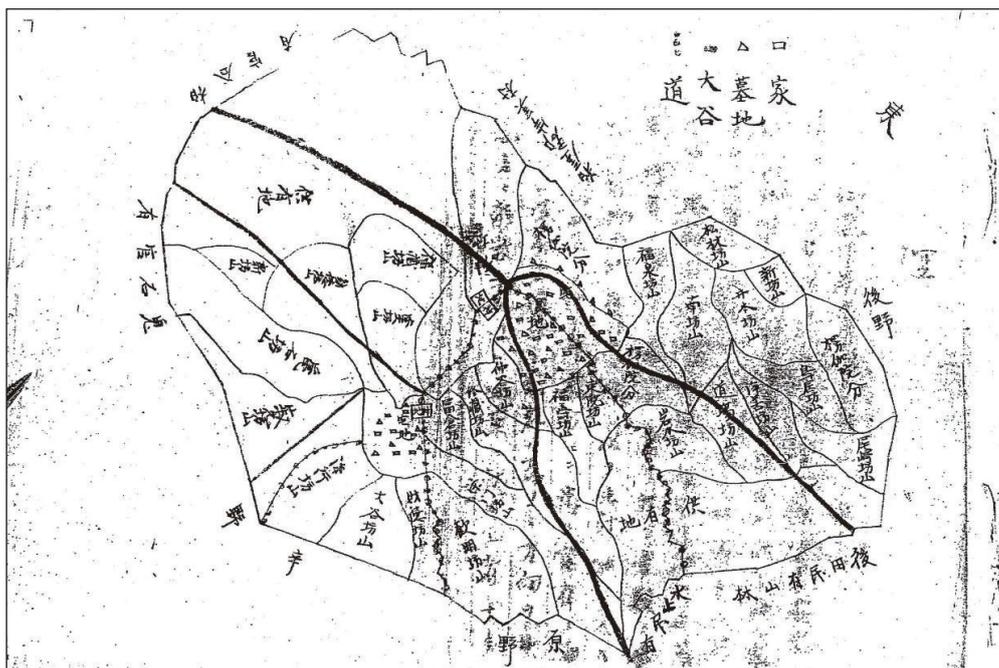


図 3-1 宝満山の山内図 (『井本文書』 個人所蔵)

ば、黒田家家臣久野外記入道卜心が山上にあった伊豆奈権現の祠を寛永年中に移して再興し、宝満山の財行坊を社僧に充てており参詣の人が絶えないとしている。信仰の山としては宝満山と一体的な扱いを受けていた。一山のまとまりがない中、寛永18年(1641)に平石坊幸重が座主に就く。慶安3年(1650)には黒田藩2代藩主忠之ただゆきにより、焼失した堂社が復興される。近世的な社会構造の構築が進展する中、宝満山も寺社再編の波に洗われ、永応元年(1652)に一山が一度比叡山の末寺に位置づけられ、多くの修験者が離山する事態が発生する。このことで山中は再度荒廃し、黒田藩3代藩主光之みつゆきの命により旧坊中に帰山の命が下りるといふ混乱があり、直後の明暦3年(1657)には彦山の末寺に、寛文5年(1665)にはそれを撤回するごとく京都聖護院の末山になった。この彦山と聖護院を巻き込んだ騒動は福岡藩の裁定で騒動の中心となった平石坊、山中坊、財行坊を離山させることで終結し、福岡藩重臣の弟を迎え、座主りょうがいん 楞伽院をたて、ようやく近世的な安定した一山の組織が再編された。

寛文11年(1671)に藩主光之から改めて山中の80万坪が寄進された。一山ではこれに基づき山中の土地管理について詮議し、分配方法や山林管理の法度を定め起請文を添えた山林式目を翌年に藩に提出した。井本坊に残された『竈門山水帳』にその詳細が残されている。山内は神地、寺内、坊山、預山に区分され上宮周辺のブナなどの原生林域が神地、東院、西院谷(中宮を含む)の坊域が寺山、各坊の営林域が坊山、共同管理や管理委託した領域が預山であった。これにより信仰の山としての美しい山容を維持管理する体制が整えられることとなった。これ以降、山中の様相は安定し峰入りの行も催行されるようになり、山中北側に羅漢道が整備されるなど、霊場としての隆盛期を迎えた。

宝満の峰入り行は江戸期を通じておこなわれ、春峰は宝満山を発して三郡山系、犬鳴山を越えて宗像孔大寺山こだいしやまに至り、織幡宮おりはたぐうで玄界灘を遙拝した後、香椎宮かしいぐう、筥崎宮はこぎぐう、博多を経て福岡城に入り藩主に対し祈禱した後に高宮たかみや、春日宮かすがのみや、武蔵寺ぶそうじ、安楽寺天満宮を経て山に戻るといふルートを通った。秋峰は筑後北部と筑豊の峰伝いを辿り英彦山(彦山)へ至り、山中での行と里での布教とが一体となった一大行事であった。黒田藩主への祈禱奉仕が度々おこなわれたことから領主との宗教的関係性が保持されていたことが伺え、慶応3年(1867)の財政難中におこなわれた勧進によって寄納集米が3000俵集まったことなどは民衆との結縁の状況が伺える。山の信仰が民衆に広がったことは博多聖福寺住持仙厓の絵画や山中の金石文に見られるような文人墨客の登拝、博多町人による山中名所(竈門岩)の復旧などにも確認される。



写真 3-3 竈門岩

5. 近代以降の宝満山

明治新政府が成立し、明治元年(1868)に出された「神仏分離令」は宝満山の信仰史にとっては最も深刻な事態を与えた。坊中は廃仏派9坊と奉仏派16坊に分かれたが、明治3年(1870)には神楽堂、鐘堂、行者堂、護摩堂(獅子宿)など山中の諸堂が焼却、破却され、法華塔、九輪塔な

どが破却された。

翌明治4年(1871)には修験者は神職に転じた。この年には坊中が管理してきた山林すべてが政府により上地となり、生活の糧まで失っている。明治5年(1872)には竈門神社が村社に位置付けられ、^{ししゅう}祠掌1名が奉仕となったため、明治6年(1873)には吉祥坊の吉田家のみを残して坊中は離山していった。坊中は里の大石などに^{かぐう}仮寓した者もあったが、後に糸島、博多、糟屋、筑紫地区などに四散して、あるものは僧侶となり、あるものは在家のまま修験の行を個人で継続



写真 3-4 福城窟

する者もあった。これにより多くの宝満山を信奉していた一般の信者は下山した山伏に付き、以降、信仰を以て宝満に登拝する人々が激減したとされる。ただ明治22年(1889)になりようやく宝満山での峰入りが再興され(その後明治26年(1893)、昭和3、7、9、13、14、15、18年(1928、1932、1934、1938、1939、1940、1943)と催行されている)、修験道による山での祭祀は命脈を保つこととなった。

明治時代初期の混乱期を経て世情が落ち着きを見せる中、明治24年(1891)に旧坊中が「上地官林払い下げ願」を県に提出した。一方で竈門神社は式内社であるにも係わらず村社格の扱いであったため、明治24年(1891)には玉依姫御陵調査として^{ふくじょうくつ}福城窟(法城窟)の調査をし、神武天皇の御母玉依姫の御陵であるとしたり、北谷村落より「氏子復旧願」が県に提出されるなどの条件整備があり、明治28年(1895)に竈門神社は官幣小社に列せられた。翌明治29年(1896)に竈門神社は県に「上地官林払い下げ願」を提出し、明治41年(1908)にようやく旧坊中が江戸期に管理していた山林の内の一部(63町8畝21歩)が竈門神社に編入され、山内が現在の民有、官有、竈門神社社地という形態となった。

官幣小社への昇格を機に境内の整備事業が企画され、境内を造成拡張した後に大正15年(1926)より下宮本殿建て替えの普請に取りかかり、昭和2年(1927)に改築、落成している(現本殿)。また、昭和18年(1943)頃までに境内の参道や石垣も新たに造作され、現在のような景観に至っている。

第2節 各地区の概要

a. 上宮地区

上宮地区は花崗岩の大きな塊からなり、宝満山における山岳祭祀の中心的な場所で、古代以来現在に至るまで祭祀が続いてきた要所である。『續日本後紀』に承和7年(840)の従五位授位(叙位)の記事が見られ、『竈門山宝満大菩薩記』では神亀元年(724)には社殿があったとされ、江戸期までは上宮が本社であった。江戸期の宝満二十五坊による山内の維持管理を記した『竈門山水帳』には、上宮近辺は先例のように、今後も枯木や倒木であっても一切伐採してはならないとされ、永らく山頂域の景観は社殿施設を除き、自然に任されてきた。上宮本殿は昭和27年(1952)に木造の社殿が焼失し、昭和32年(1957)にコンクリート造のものが建設され現在に至っている(写真3-5)。社殿西側の前面は鉄筋コンクリート製の懸造り式の平場となっている。山頂域の平場には